

令和元年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月14日実施)	総合評価(3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①基礎学力の育成を軸に、社会的・職業的に自立できる人間の育成に向け、教育課程の工夫・改善に取り組むとともに、授業力を高めるための組織的取組みをすすめる。</p> <p>②学校行事や生徒会活動における生徒の主体的な活動の促進を図る。</p>	<p>①授業見学や授業改善のための研究会を活用し、教職員のスキルアップを図るとともに、生徒の主体的・協働的な学びを実践するためのシステムを構築する。また、放課後補習の機会を積極的に活用し、生徒の基礎学力向上を図る。</p> <p>②学校行事や生徒会活動に生徒が主体的に参加し、仲間と協働的な活動を行うことで心身の成長を促し、社会性を身につける。</p>	<p>①学習活動研究会を企画して「生徒同士が話し合い、発表する機会」の持てる授業を推進し、生徒の実態に応じた授業支援を実践する。</p> <p>①「学習活動研究会ニュース」を発行して、教職員間で生徒の実態に応じた授業法を共有する。</p> <p>①田奈ゼミ及び進学研究会をいっそう充実させ、基礎学力不足の生徒や進学希望生徒に適切な支援を行う。</p> <p>②諸行事において、生徒の主体的な活動を導き出すため、教職員が丸とになってフォローアップに努める。</p>	<p>①学習活動研究会を何回実施できたか。</p> <p>①「学習活動研究会ニュース」を何回発行できたか。</p> <p>①田奈ゼミ及び進学研究会への生徒の参加率が上がったか。</p> <p>②生徒の諸行事への参加率を上げることができたか。また、事後アンケートにおいて行事への満足度が向上したか。</p>	<p>①学習活動研究会を昨年度よりも回数を増やし、4回実施した。うち1回は「心のバリアフリー」をテーマに、株式会社三和製作所職員を講師に迎え、パラリンピック種目である「ボッチャ」を体験することで差別を排除し、お互いの良さを認め合って協働していく力を高める研修を実施した。その他、ICTを活用した授業について協議した。</p> <p>①「学習活動研究会ニュース」を3回発行し、効果的な学習活動について全職員で共有した。</p> <p>①田奈ゼミの参加率を上げることはできなかったが、参加した生徒に対してボランティアによる継続的な学習支援を行うことができた。</p> <p>②あいさつ運動やエコキャップ回収などにおいて、生徒会役員が率先して活動するなど、生徒が主体となって表舞台に立ち、活躍する姿が例年よりも多くみられた。しかし、一部の生徒に仕事が偏ってしまう状況があった。</p>	<p>①授業改善グランドデザインを目標達成に向かうことができるよう、PDCAサイクルで策定し、実施していく方策を考える。</p> <p>①継続的な授業改善を進めるために、教科ごとにテーマを設定した学習活動研究会を企画していく。また、授業改善の取組に加え、生徒理解につながる研修や、バリアフリー、インクルーシブといった多様なシステムに関する力を身に付ける場所として実施していく。</p> <p>①「学習活動研究会ニュース」の内容の一層の充実を図り、発行回数を増やしていく。</p> <p>①ボランティア確保が難しくなっているので、何らかの方策が必要。田奈ゼミの開始時間によっては生徒に負担がかかる場合があるので、参加しやすい方法を検討したい。</p> <p>②生徒のニーズや現状に沿った行事運営を考える。生徒が積極的に参加できるように、内容を検討し、クリエイティブスクールならではの行事を模索していく。その際は生徒の力だけでできる作業を見極め、主体的に参加できるような細かい役割分担などを設定していく。</p>	<p>①学習活動研究会において単に授業技術のスキルアップだけでなく、バリアフリーについて学び、協働していく力を養うという試みは効果的である。</p> <p>①田奈ゼミの参加率を上げるための方策を具体的に立てることができたか、検証する必要がある。</p> <p>②生徒の行事への参加意欲が失われている状況がよく分かった。その中でも生徒会役員を中心に活動を続けていることは評価できる。</p>	<p>①外部講師を招いての学習活動研究会は有効であった。ただし、生徒対応に追われ、職員が日常的に参加できない状況がある。</p> <p>①田奈ゼミの参加者が減少している。また、ボランティアの確保も相変わらず難しい。</p> <p>②生徒の行事への参加率が下がってきている。また、部活動への参加率も年々下がってきている。中学時代に不登校であった生徒も多く、コミュニケーション能力にも欠けるところがある。さらなる状況分析と、活性化に向けた対策が急務である。</p>	<p>①なるべく多くの職員が学習活動研究会に参加できるよう、日時の設定や実施方法を工夫する。学習活動研究会そのものについてもビデオで撮影し、いつでも職員が閲覧できるようにサーバー上に保管するなどの方策も効果的である。</p> <p>①田奈ゼミ等の補習に全職員が関わることで、より多くの生徒を参加させる。</p> <p>②それぞれの生徒の置かれている状況や家庭環境などの背景を職員間で情報共有し、生徒の現状に沿った行事を計画し、運営していく。</p>
2 生徒指導・支援	<p>①生徒一人ひとりが抱える課題を的確に把握し、きめ細かい個別支援を行うための仕組みづくりを進める。</p>	<p>①生徒、保護者への定期的な面談を行う。また、校内の相談体制を整え、連携することで迅速かつ適切な情報共有を行い、生徒の抱えている状況を把握する。保護者や外部機関と連携しながら生徒個々の状況に合った支援を行い、課題解決を図る。</p>	<p>①SC、SSW、Drop-In等の相談システムと連携し、生徒の情報を迅速かつ的確に収集、共有する。</p> <p>①オンザフライミーティングを活発化させ、常に生徒の持つ課題の背景を把握し、予防的生徒支援へと発展させる。</p> <p>①年3回の三者面談や校内の相談システム等を活用し、必要に応じて児童相談所、警察、市の生活支援課等と適切に連携しながら課題解決を図る。</p>	<p>①SC、SSW、Drop-In等の相談システムと連携し、ケース会議を行ったか。</p> <p>①オンザフライミーティングの機会を積極的に設け、情報共有を図ったか。</p> <p>①年3回の三者面談や相談システムで得た情報を教職員間で共有したか。また、必要に応じて外部機関と連携して課題解決にあたったか。</p>	<p>①校内の各種相談システムと連携し、生徒の問題行動の予防支援及び家庭状況等の把握など、細やかな情報交換ができ、ケース会議につなげることができた。</p> <p>①職員間でオンザフライミーティングの機会を積極的に持つことができた。これにより迅速な対応が可能となり、かつ時間を有効に使うことができた。</p> <p>①三者面談や各種相談システムでの情報を児童相談所などの外部機関に効果的につなげることができた。特に今年度はネグレクトやDVなど、生徒の家庭内の諸問題が顕著に現れたが、SSWとの連携により、早い段階で対応することができた。</p>	<p>①職員全員が本校の様々な相談システムについて理解を深めることが重要である。SCやSSW、SCCはもちろん、キャリア支援センターの活動やびっかりカフェの意義等に対しても理解を深められるよう、研修を充実させていく。また、教育相談コーディネーターの複数化や育成が急務である。</p> <p>①生徒が抱える課題は重層化しており、教職員の情報共有だけでは対応できなくなっている。特に家庭環境からくる諸課題のある生徒が増加し、外部機関との円滑な連携が必要不可欠である。また、家庭との連絡がとれず、協力的でない保護者に対するアプローチと協力を得るノウハウについて、職員研修等を通じて、経験の浅い教員の資質を向上させる必要がある。また、そうした外部機関との連携については専門的な知識も必要なことから、転任者についても早い時期に研修を行う必要がある。</p>	<p>①校内の様々な相談・支援システムを有効に活用することができている。</p> <p>①職員が隙間時間を使って情報共有する試みは「働き方改革」の理念に沿うものであり、有効である。</p> <p>①児童相談所や警察等の外部機関との連携がスムーズかつ適切に行われており、迅速な問題解決につながっていることは評価できる。また、SCやSSWとの連携もよどみなく行われている。</p>	<p>①それぞれの相談システムの窓口となる職員の負担が増大している。</p> <p>①生徒の抱える課題がより重層化しており、学校での対応に限界を感じるものが多くなっている。</p> <p>①学力の低下のみならず、コミュニケーション能力の乏しさ、自己肯定感のなさ、人との信頼関係が築けない等、自立した社会人を目指すにあたっての資質・能力に欠ける生徒が増えている。</p>	<p>①教育相談コーディネーターが丸抱えないよう、早い段階でのケース会議をまめに実施する。</p> <p>①児童相談所や市の生活支援課、警察などと効果的に連携しながら課題解決にあたる。また、外部機関との連携について、そのノウハウを身につけるための研修の機会を持つ。</p> <p>①成功体験を少しでも持てるよう、それぞれの生徒の実態に即した教育内容を考えていく必要がある。</p>

	視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月14日実施)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
2	生徒指導・支援	②部活動における生徒の主體的な活動に向けた支援を進める。	②部活動を通じて生徒の自己有用感を高める。部活動の意義を説明し、参加を促す機会を積極的に設け、加入率の向上を目指す。	②生徒会主体で部活動加入を促すキャンペーンを実施する。 ②積極的に合同練習や対外試合に参加し、その結果を学校全体で共有することで部活動を盛り上げ、生徒の自己有用感を高める。	②部活動加入率を4割程度まで上げることができたか。 ②活動実績を全校集会等で共有できたか。	②部活動への関心・意欲が低下していることに加え、入学者数の減少の影響もあり、加入率は低下した。 ②他校との合同チームによる大会参加など、活動の質と量は確保できた。また、各種資格試験に挑戦する生徒が増え、その成果を全校集会等で披露することができた。	②加入率アップを目指し、勧誘方法の改善や体験の機会を設けるなど、より魅力的な部活動紹介を行う。また、部長会や部活動集会を定期的に行い、部活動に対するモチベーションを維持できるよう支援する。 ②他校との合同チーム編成をよい機会ととらえ、社会性や自己肯定感を養うきっかけとする。また、各種検定試験に積極的にチャレンジする雰囲気を作り、生徒の意欲を喚起する。	②田奈高校の生徒の様相が子供の貧困に関して議論されていることと一致している。「育て直し」「育ち直し」が必要な高校生をクリエイティブスクールが引き受けているのだという自覚が必要である。	②合同チームで大会に参加できた生徒は自分への自信を持つことができ、よい経験となった。 ②部活動の加入率を上げることが急務であるが、従来の部活動のあり方の考えから脱却する必要がある。	②出来る範囲での活動から少しずつ始めるなど、生徒の実態をよく見極めつつ、適切な目標を設定して活動にあたらせる。 ②自己肯定感を持たせる仕掛けを工夫する。
3	進路指導・支援	生徒の実態やニーズを的確に把握し、個人の努力のみで達成できない社会的バリアの除去を含む視点からの支援を併せて行うとともに、そのための仕組みづくりを進める。	①生徒の希望と適性を考慮しつつ、早い時期からSCCや外部機関と連携した進路支援を行う。また、個々の生徒の置かれている状況を適切に把握し、情報を共有しながら支援にあたり。	①SCCによる就労支援プログラムを充実させる。 ①大学、企業、地元法人会等と連携を進めることにより、企業の採用枠、大学の指定校推薦枠等の拡大を目指す。 ①卒業生や中途退学者への適切な支援を行うため、キャリア支援センターの役割を見直し、明確化する。	①SCCによる「さくら咲くキャリア教室」を何回実施できたか。 ①求人数、指定校推薦の学校数等が増えたか。 ①キャリア支援センターの役割を明確化できたか。	①「さくら咲くキャリア教室」を15回実施し、生徒の就労への動機づけを行った。 ①SCCによる就労先開拓をはじめ、地元企業による校内企業説明会を行うなどした結果、企業からの求人数を引き上げることができた。 ①「支援のヒント集」を作成し、キャリア支援センターの役割を明確化するとともに、田奈高校の支援システムを職員全体で共有した。 ①職場見学体験、模擬面接、自立支援等の諸活動において、緑法人会の多大な協力をいただき、連携することができた。	①就労に向け、生徒に対してなるべく早い時期からの働きかけが求められるが、現状SCCの尽力による部分が大きく、負担となっている。SCCとの業務連携をキャリア支援グループだけでなく、全職員が意識して協働していく必要がある。 ①キャリア支援センターの役割の明確化についてはまだ課題が残っている。どこまで生徒を支援するか、その線引きを模索していく必要がある。 ①緑法人会との連携において、校内の連絡体制が徹底せず、ご迷惑をおかけしたことがあった。今後はそのようなことがないよう、連絡体制を整えたい。	①生徒の就労支援について、SCCと適切に連携しながら効果を上げている。 ①「支援のヒント集」を作成し、大量異動があっても田奈高校の取組を継続していけるようにしたことはよかった。 ①模擬面接等、法人会との取組の意義について、学校側でもう一度整理する必要がある。	①SCCと教員が連携した就労支援について、相互の意思疎通を効果的に図る方策を考える必要がある。 ①「支援のヒント集」を配付できたことはよかったが、これを利用した職員研修を実施することができなかった。 ①緑法人会をはじめとした外部機関との連携方法を再確認する必要がある。	①SCCと職員の連携強化を進め、SCCとの共通認識に立った就労支援を展開していく。 ①「支援のヒント集」を利用した職員研修を年度初めに実施する。 ①緑法人会とのさらなる協力体制を進めるため、連携の当初の理念に立ち返り、職員への説明機会を設けていく。
4	地域等との協働	地域の様々な社会資源との協働を通して、地域に根ざした学校づくりを進めるとともに、地域貢献活動を充実させる。	①地域への貢献策としてボランティア活動を充実させる。 ②校内外の機関を積極的に活用し、生徒の社会的実践力や自己有用感を高める活動を実施する。	①ボランティア等の地域貢献活動を実施するなど、地域社会への参画の機会を設定する。 ②ぴっかりカフェボランティア、自治会、公共施設等と連携し、生徒の活動機会を拡充するとともに、地域の学校理解を促進する。	①近隣の学校、福祉施設、自治会、行政機関等と連携したボランティア活動に何回参加したか。 ②生徒が地域の行事に参加できたか。また、地域の方が学校を訪問する機会を持てたか。	①地域貢献デーをはじめ、行事前の部活動生徒による清掃など、5回、延べ150人を超える生徒が取り組んだ。 ①麻生養護学校プールボランティアに9名の生徒が参加した。 ①こどもの国で実施された小学生向けイベントのボランティアに生徒会本部役員が参加した。 ②文化祭で地域の方の来場がみられたが、人数は限定的であった。 ②NPO法人による校内居場所カフェ(ぴっかりカフェ)において、地域の方を中心に延べ200名以上のボランティアの方にご協力いただいた。	①地域のイベントやボランティアへの参加が生徒会役員や部活動生徒に限られている現状があるので、他の多くの生徒が参加できるよう見直ししていく必要がある。また、地域での活動の機会が少ないので、新たな活動場所を開拓していくことが求められる。 ②ぴっかりカフェをきっかけに、地域との協働を進めていくための仕組みを作るとともに、職員に対しては研修を行うなどしてカフェとの協力・連携体制をさらに強化し、充実させていく必要がある。また、カフェボランティアの方々の持つ資源を活用していく方策を考える。 ②地域の方が学校を訪問する機会を増やせるよう努める必要がある。	①既存のボランティア活動は、参加者は減少しているとはいえ実施できたことは評価に値する。 ②ぴっかりカフェボランティアと教職員との連携が、生徒たちを「育て直す」ための重要な力になることを再認識し、深化させる必要がある。	①例年続けている麻生養護学校のプールボランティア、地域貢献デー以外に、生徒たちが地域のボランティア活動に参加する機会が少ない。 ②ぴっかりカフェボランティアと教職員との連携が十分になされていない。 ②地域との交流の機会を設ける必要がある。	①部活動や委員会単位での地域ボランティア参加の機会を増やしていく。また、近隣小学校でのクラブ活動指導などの取組を充実させる。 ②ぴっかりカフェボランティアと教職員との交流や研修の機会を増やしていく。 ②既存の行事等で地域連携が可能か検討していく。
5	学校管理 学校運営	学校が抱える課題に対して、教職員が意欲を持ち、主体的に教育に取り組むための「生き生きとした職場づくり」を図る。	①個々の教職員が進んでコミュニケーションを図り、お互いの成長を促せるような職場の雰囲気醸成する。 ②業務の「ムダ・ムラ・ムリ」を解消することで効率性を上げ、働き方改革を実現させる。	①自分自身で考える習慣を身につけ、提案によるコミュニケーションを心掛けることで教職員相互の成長を促す。 ②ネットワークや共有サーバー等のIT環境を整備し、効率的な業務システムを構築する。また、情報機器の活用やセキュリティについての校内研修を充実させる。	①企画会議を戦略的な意見交換の場にしたか。また、全職員による意見交換会を何回実施できたか。 ②IT環境の整備を実施したか。情報に関連した校内研修会を何回実施したか。	①稟議を活用して時間を捻出し、企画会議において学校運営の根幹に関わる意見交換を回数少ないが実施できた。 ①ワールドカフェ方式で学校の抱える諸問題について協議しあう中間意見交換会を実施し、目指すべき学校の姿を共有した。 ②グループウェア等のICT環境を活用し、生徒と向き合える時間の捻出及び会議資料のペーパーレス化などに取り組んだ。また、ICT活用チームを立ち上げ、新たに整備されたBYOD回線を利用した教員への研修や模擬授業等を行った。	①田奈高校のカリキュラム・マネジメントについて、職員が活発に議論する機会を設ける。その中で、クリエイティブスクールの存在意義を再確認し、既存のシステムで見直すべきところは見直し、全員が共通の認識で学校運営を進めていくようにする。 ②ICT環境を活用した校務運営をさらに進めていき、生徒と向き合う時間や授業改善、職員研修の機会を確保する。また、校務の効率化による時間短縮を進め、「働き方改革」を実現する。	①職員の大量異動に備え、田奈高校の持つシステムやノウハウを引き継いでいく方策を検討していることは評価できる。 ①1学年に複数担任制を導入し、その効果があったことは評価できる。	①クリエイティブスクールにふさわしいカリキュラム・マネジメントとはどのようなものか、全職員の共通理解が必要である。 ①複数担任制の効果が諸所に現れた。 ②校務のICT化を一気に進めていけたことは今年度の大きな成果であった。	①クリエイティブスクールとして何が求められているか、困難を抱えた目の前の生徒たちに何ができるか、職員研修をために開いて考えていく。 ①複数担任制をさらに拡大していく。 ②校務のICT化をいっそう進め、「働き方改革」を進める一助としていく。